
キミノトナリ

紅満 紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キミノトナリ

【ZPDF】

Z29161

【作者名】

紅満 紗

【あらすじ】

「お前、俺と付き合わね?」

ほんとは分かつてたよ

あの告白は…本気だつたんだよね

ちゃんと返事出せなくて…
意気地なしでごめんね

告白

「 - 空 - - - 」

「 ほえ？」

放課後

突然後ろからあたしを呼ぶ声がする
驚いて振り返ると同時に頬を詰めたい感触が伝った

「 ひつ 冷たつ ! ! 何 ? 」
「 缶ジュースでさア 」
「 もー 総悟 ! ! 」

その当人は… 沖田総悟

学校ではすつしゅうモテるくせに、何かとあたしに突っかかるてくる

… 所謂悪友だ

「 そのジュー スやりますア 」
「 え マジで ? 」
「 おうよ 200円な 」
「 げつ 金取んの ? 」
「 元談でイ 」

まあ、良い奴であることには変わりはない… はず
だって缶ジュー スくれたし

「 オレンジジュー ス… かあ… 総悟も案外子供だねー 」
「 文句あんなら飲むな 」
「 あはは 「 めん 」 めん 」

缶ジューースのふたに指をかけると「ブッシュ」と新鮮な音を出す
一口飲むと、喉がひんやりしてすゞしく気持ちよかつた
一回口を付けた缶ジューースを額に当て、冷たさを実感しながら重い
肩を起こす

「そういえばセー」
「ん？」

隣に座つてゐる総悟があたしの顔を覗き込んでくる

「お前つて…好きな奴とかいんのかイ？」
「…え？」

「好きな人…？」

「い、いないよつ
「ふーん」

何よ突然

「じゃあ…セー、
「ん？」

「お前、俺と付き合わね?」

「…!」

- 放課後の…ほんのりオレンジな教室
すぐ隣にいる総悟が

不思議と近かつたり

「…あえつと…」

「…」

「冗談…だよね?」

咄嗟の判断だつたつもり

突然の告白に、驚いたのは本当
でもあたしは彼の本気の告白を
?「冗談?と銘打つた

今の関係を壊したくなかったし
自分の気持ちなんて盲目だつた
だから…

「…お前エスパー?」

「あはは 総悟、冗談キツいよー」

「悪イ悪イ」

彼の返事には

安堵の気持ちとほんのり切ない気持ち

ほんとは分かつてたよ

あの告白は…本気だつたんだよね

ちゃんと返事出せなくて…

意氣地なしで”めん

嫉妬（前書き）

自分の気持ちが分からぬから…
あたしはまた一つ
自分に嘘をついた

嫉妬

結局

昨日のあの牛田のせいでもとんど眠れなかつた…

だつて

初めて見たんだもん 総悟のあんな顔…

目が本氣だつた

だからあの牛田は…

「空ー」

「へー?」

「…総悟…」

「よひ」

よりによつて考え事してゐる時に突然後ろから声をかけられて、驚いちゃつて、つこはしたない声を出してしまつた…

声の主は…当然の如く総悟だつた

気まずくて顔を上げられない

こんな態度とつて、総悟怒るかな…

「元氣ねーなア 何かあつたかイ?」

「…何でもないよ

「モーか?」

嘘 何でもないわけない

「元気がない原因は……総悟なんだよ？」

「元気ならいいんでいい、」

「あ、あのね総悟、」

「あー！総悟君！！」

「へ？」

その声に反応してしまったのは
あたしの方だった

声のするほうへ視線を向けると、そこに立っていたのは多分同学年の女の子
すっごく美人で、茶髪のウェーブが太陽に照らされてキラキラ光つ
て見える

「ゆき」

「え？」

総悟：今何て？

「えへへ 総悟君おはよー」

「おう ゆきはいつも元気だなア」

「うん だつてゆき、元気だけがとりえだもんつ……」

「ハハツ 違エーね！」

嘘…

総悟が女の子の事、名前で呼んでる…
うそ…何で？

「あ、そうだ……ゆきね、機種変したの アド交しない？」

「いいですゼイ ケータイは？」

「えっとねえ…あれ? ケータイ忘れてきちゃった」

「お前は…ほんとに天然で困りますア」

「ひつビーーーー! 総悟の意地悪…」

「忘れる方が悪いんでア」

あれ…

何でこんなにムカムカするの…?

「だつてえ…」

「だつてじやねーの」

どうして…総悟はその子はそんなに優しいの?

なんで…

どうして…こんなに切なくなるんだかつ

「空?！」

「…え?」

ふと総悟に名前を呼ばれ、うつむいていた顔を上げると

首元に、一粒の涙が落ちる

その冷たさと寂しさに涙だと痛む

あたしつけば、何で泣いてるんだか…

「何泣いてるんでイー?」

驚いた表情の総悟

何で泣いてるのか…あたしにだつて分からなによ

「田に…ゴミが入ったの」
「取つてやりまさア 田につぶれ」
「ん」

そつとあたしに触れる総悟の大きな手が
妙に心地よくて

分からないから…
自分の気持ちが分からないから

あたしはまた一つ

自分に嘘をついた

嫉妬（後書き）

うーん…微妙だね。
総悟が総悟じゃないし…！
連載つてむずかしいよ。へへ

ここまで読んでくださった方、ありがとうございました

眞田（謙吾）

自分の気持ちが分からないうから、どうするにも出来ないの

総悟：

「めんね

「空…保健室行くかい？」

あたしに尋ねる総悟の声は

心配が募つて曇っていた

「…行く」

「送つてく」

「だ、大丈夫だよ…」

これ以上総悟に心配かけたくないのに…

「いいから ゆなー悪イ、先行つてろ」

「うん…分かつたあ」

そう言つて顔を向けてとまどとまど歩き出す

彼女の寂しそうな背中が、やけに田に焼きついた

みなさんに悪いことしちゃった…

でも不謹慎かな

総悟があたしを優先してくれたみたいで

何だか嬉しいよ……

「空」

「ん？」

「鞄持つてやるから、かしなせヨ」

「え でも……」

なんだか悪いな……

「何だでヒ いつもならラッキーとか言って容赦ねーくせヨ」

「……」

「今日は変だな 何かあった?」

「…総悟」

「ん?」「

なんで…こんなに優しいんだよお……

あたし ひどい事したじやん

告白とか…なかつた事にしあわへ

今だつて

泣いて総悟を困らせて

「総…」

「お詫…」

「どうした?」

「目、痛い」

「よしよし」

でも…ごめんね

自分の気持ちが分からないうから、ビックリするよりも圧迫感の

総悟…

ごめんね

盲目（後書き）

ふう～：

話がなかなか進みません。笑

バカ（前書き）

それは多分

総悟のせいだよ

バカ

「失礼します」

軽快な声とは裏腹に、保健室からの応答はない

「あれ 誰もいねーの?」

「…みたいだね」

先生のいない保健室は空っぽだった

「どうすっかなー…」

「も、戻る？ あたしはもう大丈夫だから…」

「ほんとに？」

「う、うん…」

後を引かない涙を必死でこらえ、引きつった笑顔で答えると総悟に頬をつねられた

「い…いつたーいつ

「嘘つけ」

「え？」

曖昧な頭を振れば手を離してくれる

「涙滲んでんじゃん まだ痛いんだろイ？」

「だ…大丈夫だよ！！」

「大丈夫じゃねーの やせ我慢は見苦しいぜ？」

「…つ」

なんだよー…

「せり」

「…？」

「入れよ」

そつぬひたりひたりを振つ回を、手を差し伸べてくれる

「…うん…」

一瞬…

ほんの一瞬だけ、手が触れる

トクン…

心臓が

いつもよつ早く鼓動を打つ

「ね、ねえ総悟！！」

「ん？」

「あのや、昨日は…」

「あら？ 薄桜さんに沖田君　どうしたの？」

「…え？」

突然の声に振り向けば
何ともまあ間の悪い保健の先生

「えつと…「イツの田に」がへつて 痛くてたまらなしだった
から保健室に連れてきました」

「そつなの… 薄桜さん、大丈夫?」

「あ、はい…」

…なんか、罪悪感
本当は痛くも何ともないのに…

「ほんとに平氣?」

「…はい」

「めん先生

「めん、総悟…

「…じやあ授業に戻りなさい もしまた痛み出したら保健室にこら
つしゃー」

「はい」

「空 戻るぞ」

「うん…」

軽くお辞儀をして教室を出ると
勇介が保健室のドアを閉めてくれる

ドアの閉まる鈍い音が何だかもじかしくて

「総悟」

「ん?」

「…ありがと」

「なんだよ改まって 明日は初雪か?」

「バカ…」

本氣で言つたの!」

「バカは余計だつづーの」

「バカだよ」

「…? お前さ、 今日なんか変じゃね?」

「え?」

変…?

それは多分 -

「そんな事ないよ?」

「ならいーけど」

あたしが変だとしたら

それは多分

総悟のせいだよ

バカ（後書き）

話がまとまらないな…
ここまで才能が皆無とは
w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2916i/>

キミノトナリ

2010年10月10日07時55分発行